

千年の森をつくる

設楽町のシンボルであるブナの木は、北海道南部から九州の山岳地帯に分布している。しかし、昔に比べると人の手によって激減しているようだ。

国内のブナ林は、大きく分けると三つのグループに分けられる。一番大きなグループは、北海道から鳥取県まで分布する日本海側のブナ林、二つ目は関東と紀伊半島に分布する太平洋側ブナ林、三つ目は中国・四国・九州に分布する西日本側のブナ林、更に、DNAの分析をする十三タイプに分かれるといわれる。また、奥三河のブナは、太平洋側にあるがDNAは、日本海側に近いといわれている。

ブナ林のよいところは、地面に堆積した落ち葉が良質な腐葉土を作るため、大量の水を蓄えることから「緑のダム」とも呼ばれる。山に潤いを与えている。この木に集まる虫を小鳥が食べ、たわわに実った種は、ここに暮らす動物たちの餌となり、様々な生きものたちを育んでくれる。愛知県内でブナの木が見られるのは、奥三河でも北東部にあたる山岳地帯にわずかに点在するだけである。その中で林を形成しているのは、段戸裏谷原生林・碁盤石山・面ノ木原生林が知られている。

町内にある段戸裏谷原生林に

は、冷厳なブナの森が残され、「きららの森」として多くの人に親しまれている。ここに訪れる人は、観光・散策や癒し、潤いを求め、毎年その数は増えている。



ブナの大木(きららの森)

しかし、きららの森のブナは、寿命がきているといわれているようだ。それに温暖化が追撃をかけ、次世代の木が減少しているようである。

更新不良によって林の存続が危ぶまれている地域では、回復事業の一つとしてブナが植栽されているが、地理的分布に基づき、同一の系統由来の種子や苗を用いて植栽し、遺伝子汚染が起らないようにすることが最も重要であるといわれ、慎重に植栽されている。

平成十年十月段戸山のブナから種を採種し苗木を育て、段戸山に戻す試みを始めてみた。ブナの苗木作りはなかなか難しく、ミズナラやコナラのように簡単にできない。種を選び苗床を作りそれなりのやり方でないと

うまく発芽せず、苗木作りは五年がかりでようやくでき上がった。

さて、ブナの苗木を植える場所は、標高八百から千メートルの山が適している。これが偶然なのか三・五ヘクタールの山が手に入った。この山はもともと段戸山の一部であったが、戦後の開拓で民地として払い下げられた沖ノ平の山であった。

その頃、小学校で環境について話をする機会があり、原生林のブナの現状や苗木作りについて話をする事ができた。話を聞いてくれた先生や子供たちは、とても興味を持ち「自分たちも手伝うことができないか」と言ってくれた。その後、学校の活動に取り入れてもらい、平成十六年五月から、子供たちによる植林が始まったのである。

ブナの苗の他に近くの山から採取したミズナラ・カエデ・アセビなどを高木・中木・低木と



子供たちによるブナの植林

うまく混生させ、太平洋型ブナ林を再生するのである。植えられた木が林となるのに何年かかるのか、とても気の長いことなのであるが、植えられたブナは子供たちの所有となるため「木の成長を見るのが楽しみだ」といってくれた。

やがて、春が過ぎ新緑が夏色に変わる頃、一つの作文がとどけられた。「みんなを優しくつつむように、私の気持ちを未来の人に伝えたい。だって人を信じてって大切なことだから……」と書かれていた。

植えられたブナの木は「心」と名づけられ、子供たちの純真な気持ち伝わってくる。

この活動は他の小学校にも広がり、植林された山は三ヘクタールを越え、子供たちの森づくりは今も続けられている。

子供たちの手によって育てられた大切な森が、次世代を越えて千年つづくようにとの願いを込め、この森は「千年の森」と名づけられた。

現在この森は十ヘクタールを越え、自然のカエデを利用したメーブルシロップや樹液採取体験ツアー・山歩きや自然観察など多様に利用されるようになってきた。

今後の取り組みとして、ストレス解消や癒しの森としての活用も進められ、都会の市民団体や森林ボランティアが参加し、自然と人との共生の場ができる

ような整備活動が始まっている。



樹液採取体験

(設楽町文化財保護審議会委員
加藤 博俊)